わたしたちの平和宣言

派遣報告の最後に、派遣中学生は各中学校の代表として
「わたしたちの平和宣言」を力強く宣言しました。

1945年8月6日、1つの兵器によって、日常は非日常へと変わりました。
原爆は人々の目に鮮烈な光を焼き付け、命を奪っていきました。
運よく生き残った人々にさえも傷と恐怖を残して、その傷は長い間、人々に残り続けています。
現代を生きる人々、私たちはその傷が段々と治り、その傷の存在を続々と忘れていってしまっています。
悲惨な当時の状況を思い出すことはつらいのですが、もう二度とこのようなことを繰り返させないためにも苦しみを忘れず、伝え、つないでいかなければなりません。
私たちは、人々は二度とこの過ちを犯さぬよう、戦争の恐ろしさを忘れず、平和の尊さを伝えていくことを誓います。

我孫子中学校　鈴木　綾乃　長谷川　千晃

77年前の8月6日、そして9日、広島と長崎に原子爆弾が投下されました。
たった一瞬にして全てが火の海に変わりました。
そして6日後、8月15日、多くの命をうばった戦争がようやく終わりました。
しかし、その後も被爆者の心に、さらに傷をつけるいじめや差別がありました。人々の心に大きな傷を残しました。
他の国でも、今多くの命が戦争によって奪われています。核という兵器がない日本でも、心身を傷つけられる人もいます。
私たちは、その現状があるなかで、次の世代に、命の尊さや戦争の愚かさを伝えていくことを誓います。

湖北中学校　ジャシンリヤナゲ・あゆみ　　川坂　晋矢

77 年前の8月6日。
1発の原子爆弾によって、広島の街やそこで生活していた人々の人生が一瞬にして奪われました。
そんな悲劇があったにも関わらず、今も世界では核兵器が作られ、争いにおびえている人が大勢います。
争いは考えや思いの相違によって生まれ、互いのぶつかり合いの中で戦争へと発展してしまうのではないでしょうか。
しかし、戦争をしたところで何の解決にもなりません。被害にあった人は永遠に心にも体にも深い傷を負います。
戦争は計り知れないほどの悲しみや苦しみを生んでしまうのです。
平和とは争いに怯えず、大切な人と共に毎日安心して暮らせる世界なのではないでしょうか。
そんな世界を作るために私たちは、77 年前に起きた悲劇、戦争の恐ろしさを伝え続けることを誓います。

布佐中学校　野尻 千結　菅 光祐

今から 77 年前の 1945 年 8 月 6 日、たった 1 発の原爆で、広島は一瞬で焼け野原になりました。誰が想像していたでしょうか。
私たちが過ごしている日常は永遠ではない。決して当たり前ではないのだと痛感させられた出来事でした。
今回、広島を訪れて、戦争が、原爆が、どれだけ醜いものなのかを肌で感じることができました。“想像以上”私たちが感じたことを表せるのはこの言葉に限ると思います。
平和とは何か。今、私たちが当たり前に過ごしている日常も、小さなことで悩む日々さえも平和と言えるのかもしれません。
またいつ戦争が起こるのか。二度と起こってほしくはありませんが、実際に世界中で戦争はまだなくなっていません。あの悲惨な出来事を二度と繰り返さないためにも私たちが学び、感じたことを語り継いでいくべきなのです。
争いによって亡くなった、本来であればなくなるはずのなかった尊い命が、これ以上無駄にならないように、私たちにできることは後世へとつないでいくということ。
戦争によって亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。

湖北台中学校　佐野 裕梨　榛葉 央河

「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」
これは、広島県の平和記念公園内にある原爆死没者慰霊碑に刻まれている言葉です。この言葉は被爆者でもある雑賀忠義さんが残しました。慰霊碑には原爆によって亡くなった方々の名前が刻まれています。
私たちも実際に広島へ行き、その慰霊碑を見てきました。慰霊碑の前に立つと、亡くなった方々への思いをずっしりと感じました。
派遣へ行く前はどこか自分たちとは遠い存在のような気がしていましたが、これからの未来を託された私たちにとってそれはとても身近なことであり、伝えていくべきことだと思いました。
広島・長崎を最初で最後の被爆地にするために、今過ごしている当たり前の毎日を大切にし、原爆の恐ろしさ、平和の尊さを後世につないでいくことをここに誓います。

久寺家中学校　中濱　陽香　松浦　篤志

1945年8月6日　午前8時15分。
雲一つない青々とした静かな空に、一発の原子爆弾によって広島は絶望に満ちた地へと一瞬にして変わったのです。
突然の出来事に唖然としている人、血だらけになって必死に子供を探す人、体が原型をとどめていない人。様々な人の命が奪われました。
これが事実なのです。
しかし近年、あの日起きた事実、そして思いを伝えている方々の高齢化が進んでいます。つまり、この悲劇が忘れられてしまうかもしれません。
それはすなわち平和から遠ざかることを意味します。平和への一歩として、唯一の被爆国の核の記憶を絶やしてはいけません。
私たちは平和な社会をつくるために、たくさんの方々の平和への願いと、この忘れがたき事実を伝え続けていくことを誓います。

白山中学校　田中　千尋　山口　桜佑

令和4年度
平和事業の記録

▲「平和の集い」派遣報告を終えて

被爆77周年我孫子市平和祈念式典

日時 ： 令和4年8月13日(土)午後5時から午後6時
場所 ： 生涯学習センターアビスタ ホール

司会 ： 平和事業推進市民会議委員
原 直輝（平成28年度長崎派遣中学生）
早乙女 凜（平成30年度広島派遣中学生）

次第 ： 開式の辞
黙祷
式辞
代表献花
千羽鶴の奉納
奉納者 我孫子中学校 鈴木 綾乃
来賓挨拶
来賓紹介
広島市派遣中学生の紹介・報告
広島派遣団長 白山中学校 田中 千尋
参列者献花
閉式の辞

◆

被爆77周年平和祈念式典は、天候不良により、前年に引き続き室内での開催となりました。また、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、座席の間隔を空けるなどの対策をとって、規模を縮小しての開催となりました。参列した約 60 名は、原爆犠牲者に哀悼の意を捧げるとともに、核兵器廃絶と平和を祈りました。
原爆の恐ろしさや悲惨さ、平和の尊さを次の世代に伝えていくため、市では若い世代にも平和事業に携わってもらう工夫をしています。その一環として、司会進行を平和事業推進市民会議の高校生と大学生が務めました。

◆

◆我孫子市長　式辞◆

　本日は、被爆77周年平和祈念式典にご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。
今年の平和祈念式典は、昨年と同様に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、規模を縮小した形での開催とさせていただきました。
　広島と長崎に原子爆弾が投下されたあの忌まわしい日から77年が過ぎました。
　原子爆弾は、一瞬のうちに多くの尊い生命を奪っただけでなく、辛うじて一命をとりとめた人々にも、心身共に生涯消えることのない深い傷を残しました。
　原爆並びに先の大戦で犠牲となられた御霊に対し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
　今年で18回目となる被爆地への中学生派遣では、市内6校の代表生徒12名とともに、8月5日から7日まで、広島市を訪問してまいりました。今年は原爆が投下された8月6日の平和記念式典にも参列することができました。被爆した小学校の見学や被爆された方から直接お話を伺うなど、現地での体験を通じて、戦争や原爆の恐ろしさ、平和の大切さを、派遣中学生たちは学んでくれたのではないかと感じています。
　明後日、8月15日に、終戦から77年目の日を迎えます。戦争体験者や被爆者の方々が高齢化するなか、同じ過ちを二度と繰り返さないよう、当時の悲惨な記憶と記録を後世へ伝えていくことがますます重要になっています。
　我孫子市においても、被爆の実相を後世へ伝えていくために、長年にわたり平和事業に取り組み、市とともにこの平和祈念式典を開催してきた我孫子市原爆被爆者の会は、会員の高齢化に伴う会員数の減少から、会としての活動を続けていくことが難しくなり、今年3月に気象台記念公園で行われた「我孫子市原爆被爆者の会　陽光桜植樹式」をもって、その活動を終えられました。陽光桜は、世界中で平和の象徴とされており、ここ平和の記念碑のそばにも被爆者の会の皆さんの手により、平成28年1月に植樹されております。陽光桜に込められた被爆者の会の皆さんの平和への思いを、私たちは次の世代へつないでいかなければなりません。
　我孫子市原爆被爆者の会の皆様には、長年にわたり市の平和事業にご協力いただきましたことを、この場をお借りして改めて感謝を申し上げるとともに、3月まで会長を務められた的山さんが、平和事業推進市民会議の一員として、現在も若い世代とともに活動を続けてくださっていることを大変心強く思っております。
　我孫子市は、唯一の被爆国として、また、平和都市宣言をしている自治体として、今後も、核兵器のない世界が実現されることを強く願い、被爆者の方々の平和への思いを胸に刻みながら、広島や長崎に派遣された経験をもつ若い世代をはじめ、多くの方々とともに平和事業に取り組んでまいります。
　結びに、日頃から市の平和事業にご尽力いただいております平和事業推進市民会議、歴代の派遣中学生をはじめとする皆様に感謝を申し上げるとともに、本日、ここにご臨席の皆様方のますますのご健勝を心からご祈念申し上げまして、式辞といたします。

令和4年8月13日　我孫子市長　星野　順一郎

◆原爆に関する写真と平和祈念の折り鶴展・平和祈念のとうろうの展示◆

平和祈念式典の開催に合わせ、「原爆に関する写真と平和祈念の折り鶴展」をアビスタで開催しました。我孫子市原爆被爆者の会より寄贈された写真パネルと、市民の方々から集まった千羽鶴、これまでの市の平和の取組の紹介などを展示しました。

また、平和祈念式典に合わせて開催を予定していた「手賀沼とうろう流し」が天候不良により中止となったことから、派遣中学生や市民の方々が思いを込めて作った灯篭を、千羽鶴などと一緒に展示しました。

＜展示期間＞　8 月 12 日(金)～8 月 25 日(木)

（とうろうの展示は 8 月 13 日(土)～8月 25 日(木)）

平和の集い～我孫子から平和を願う～

日時 ： 令和4年12月4日(日)午後1時30分から午後4時
場所 ： けやきプラザ ホール

司会 ： 平和事業推進市民会議委員
　　籾山 大雅 （大学3年）
　　高須 万悠香 （大学1年、平成29年度広島派遣中学生）

次第 ： 開会
　　主催者挨拶
　　我孫子市長 星野 順一郎
　　我孫子市平和事業推進市民会議 会長 北嶋 扶美子
　　第1部 令和4年度派遣中学生による報告
　　第2部 我孫子中学校演劇部による劇
　　「輝けいのち －ヒロシマの地下室から－」

◆

派遣中学生による報告会は、派遣事業が開始した平成17年度から、標題を変えながら続いてきました。今年度は約260名が来場し、広島派遣報告と我孫子中学校演劇部による劇をご覧いただきました。中学生たちの発表に、多くの感動の声が寄せられました。
この事業は市と我孫子市平和事業推進市民会議の共催事業で、準備や当日の運営を共同で行っています。また、司会を市民会議委員の大学生2名が務めました。

◆

▲司会と平和事業推進市民会議会長挨拶

▲我孫子市長挨拶

◆第1部　広島派遣中学生による報告◆

令和4年8月に広島市に派遣した中学生12名が、現地で学び感じたこと、平和について考えたことなどを発表しました。派遣報告の最後は、中学校ごとの「平和宣言」で締めくくられ、中学生たちは自分の言葉で平和への思いを語りました。

▲我孫子中学校

▲湖北中学校

▲布佐中学校

▲湖北台中学校

▲久寺家中学校

▲白山中学校

◆第2部　我孫子中学校演劇部 「輝けいのち－ヒロシマの地下室から－」

市内中学校唯一の演劇部である我孫子中学校演劇部は、平成25年から毎年、戦争や平和をテーマにした演劇を通して、観る人に平和の尊さを伝え続けています。今年も11名の中学生たちが一生懸命演じました。

上演後、10 年に渡る平和の集いへの出演に、星野市長から感謝状が贈られました。

＜あらすじ＞
1945 年 8 月 6 日、和子を身ごもっている母は、自宅で被爆し、貯金局の地下室に避難した。地下室は被爆して苦しむ人々がひしめいていた。
被爆から 2 日後、母は産気づく。傷つき苦しむ人々は、母を気遣うがなす術がない。
そこに、1 人の傷ついた産婆が「私が生ませましょう」と立ち上がった。
原爆投下後の暗闇の中から、ひとすじの光が放たれた瞬間を描いた物語。
※この物語は、原爆詩人・栗原貞子（くりはら　さだこ）さんの代表作「生ましめんかな」のモデルとなった実話をもとにした話です。

◆「平和の集い～我孫子から平和を願う～」展◆

平和の集いの開催に合わせて、11月23日から12月4日まで、アビシルベとけやきプラザギャラリーで展示会を開催しました。

アビシルベでは、広島平和記念資料館所蔵の「サダコと折り鶴ポスター」を展示しました。広島で2歳のときに被爆し、わずか 12 歳で亡くなった佐々木禎子さんの生涯を紹介したポスターとともに、市民の皆さんから市に寄せられた沢山の千羽鶴を展示しました。

けやきプラザのギャラリーでは、広島・長崎派遣中学生リレー講座の様子や、広島の高校生が被爆者の話をもとに描いた「原爆の絵」、8月の平和祈念式典時に作製した灯篭などを展示しました。

▲アビシルベの展示の様子

▲けやきプラザ　第１ギャラリーの展示の様子

▲けやきプラザ　第２ギャラリーの展示の様子

広島・長崎派遣中学生リレー講座 「未来を生きる子どもたちへ」

実施期間 ： 令和4年6月から令和5年2月まで
実施場所 ： 市内の小学校13校（6年生対象、計33クラス）
講師・アシスタント参加人数 ： のべ105人

◆

広島・長崎派遣中学生リレー講座は、戦後70年記念事業として被爆地派遣経験者の学生たちが企画し、平成27年度に開始しました。広島・長崎で学び、感じたことを若い世代に伝え一緒に平和について考えてもらうため、自らが講師となり、内容を工夫しながら小学6年生に授業を行っています。
事業開始から8年間で7，700人以上の児童が受講しており、「リレー講座を受講したことをきっかけに派遣に参加した」という中学生もいて、平和のバトンが次世代につながれています。

◆

▲R4.6.6 布佐小学校

▲R4.6.8 我孫子第一小学校

◀R4.6.25 新木小学校

▲R4.7.12　並木小学校

▲R4.7.13　我孫子第四小学校

▲R4.10.1　布佐南小学校

▲R4.10.20　湖北台東小学校

▲R4.11.18　高野山小学校

▲R4.11.26　湖北台西小学校

▲R4.11.26　根戸小学校

▲R4.12.7　我孫子第二小学校

▲R4.12.12　湖北小学校

▲R5. 2. 3　我孫子第三小学校

◆我孫子から平和を願う～我孫子市平和事業ブログ～◆

我孫子市の平和事業や平和事業推進市民会議の
取組みを紹介しています。
令和４年度広島派遣レポートや、「平和の集い」の
様子を映像とともに紹介しています。

http://peace-abiko.blogspot.com/

平和祈念文集

▲「原爆の子の像」に全国から奉納された千羽鶴

広島派遣を終えた派遣中学生による感想文です。
広島で学んだこと、感じたことを率直な自分の言葉で記しています。

我孫子中学校　　長谷川　千晃

『広島派遣の感想』

私は、この度広島派遣事業に参加させていただき、原爆ドームや平和記念資料館へ訪れたり、平和記念式典に出席させていただいたり、多くのことを学びました。

一日目は、広島原爆死没者追悼平和祈念館と平和記念資料館へ行きました。この広島原爆死没者追悼平和祈念館では、中に入って少し進んだところに平和祈念・死没者追悼空間があり、爆心地から見た被爆後の街並みを見ました。この空間には、死没者数約14万人と同数のタイルが使われていると知り、胸が締め付けられました。次に、平和記念資料館では、被爆した方々の遺品や被爆の惨状を表した写真や資料を見ました。それらを見ることで、原爆が落ちた際の状況や原爆によって起こったことについて知り、自分が想像していたものが甘かったことを実感しました。記念館で見て一番記憶に残っていたのが、「夜は寝ないようにしていた」というものです。被爆直後は、周りに死体が大量にあり、死体とまちがわれないように寝なかったと書いてありました。今でも徹夜で一日中起きている人はいたりしますが、それに生死がかかっているというのは、今からしてみるとあまり信じられないことだと思いました。

二日目は平和記念式典に参加し、その後平和記念公園、本川小学校平和資料館、おりづるタワー、広島城へ訪れました。平和記念式典では多くの方々の話を聞くことができました。その中でも印象に残っているのは、小学校六年生のバルバラ・アレックスさんと山崎鈴さんが発表した『平和への誓い』でした。その中でこんな言葉がありました。

「自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは強さとは言えません。本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとすることです。」

私はこれを聞き、確かに武力、核兵器は力であって強さではないなと思いました。武力を用いれば、相手も武力で対抗してきます。しかし、相手を尊重すれば、最初のうちはダメでもだんだんと打ち解けることができます。だから、相手を尊重し、相手を理解することこそが本当の強さになるという言葉を聞いて、深く感動しました。一つの過ちによって多くの方々が亡くなってしまいました。だからこそ、私たちは本当の強さを手に入れなければならないと思いました。

本川小学校平和資料館では、被爆した小学校を見ました。建物は被爆によって多くの

箇所が破損していました。私はその資料館で、『広島の　八月六日は　登校日』と書かれた灯籠を発見しました。『核に負けない』という気持ちが現代まで継がれているのを感じ、とてもすごいことだなと感じました。また、『米国のお友達』という言葉も発見しました。これは、被災した小学校がアメリカから支援を受けており、アメリカが日本のことを思い、尊重、行動した結果からこの言葉が生まれたのかなと思いました。

三日目は多聞院を見学した後、二度目の平和記念資料館の見学を行った後、内藤さんから被爆体験講話を聴講しました。そこでは内藤さんの実体験をお聞きすることができました。1945年8月6日月曜日、内藤さんは被爆しました。その時、内藤さんは偶然、防空壕にいたそうです。外が落ち着いた後に、内藤さんは家に向かいましたが、父は全身が焼けただれ、母は崩れた家の中に取り残された弟と妹を助けていました。その後、離れた防空壕へ向かい、最低限の治療を受けた後、父は寝込んでいましたが、8月10日、突然立ち上がり、「天皇陛下万歳」と一言言った後、息を引き取ったそうです。弟や妹、父までもが死んでしまった後、何とか母と二人で暮らしていましたが、父が亡くなった8年後に過労と脳出血によって母が亡くなってしまったそうです。私はこれを聞いて、核の爪痕は今も強く残っていることを感じました。当年、1945年からの10年間は経済的、精神的な苦痛が大きく、戦争の後だったので必然的に物資が少なくなり、工場などがすべて、今で言うブラック企業のようになってしまいました。そして核は、今にも傷跡を残しています。核から放出された放射線によって亡くなった方は、合計約33万人にものぼり、今年亡くなった方には約5千人もいます。

私はこの広島派遣を通じて、戦争と核に向き合うきっかけをもらいました。今も戦争が起きています。私はそれを他人事のようにとらえていましたが、戦争は、今この時代を生きる私たちだからこそ、向き合わなければいけない大きな課題の一つだと思います。まずは自分から身近な人にこの広島派遣で得たこと、感じたことを伝えていきたいと思います。

我孫子中学校　　鈴木　綾乃

『広島に行って感じたこと』

　私は広島に行って、戦争の悲劇を繰り返してはいけないと改めて感じました。

　一日目は、まず平和祈念館を見学しました。亡くなった人の数は知っていたけれど、その人たちの名前や顔を一人ひとり見ると、これだけの人が亡くなってしまったんだという実感がより湧きました。その後、資料館を見学しました。ボロボロになった服、真っ黒に焦げた肌、後遺症で肌に紫の斑点が出ている様子の写真といった、インターネットで調べるだけでは見られないような目を背けたくなる資料がいっぱいあってつらい気持ちになりました。また、資料のそばに亡くなった人やその遺族の言葉があるものもあって、とても心が痛みました。そして一番つらかったのは、この資料のようなことは人の手によって行われたものだということでした。また、別のエリアでは、広島・長崎で使われた原子爆弾だけでなく、より威力の強い水素爆弾もあるというのを見て、原子爆弾でもあんなにひどい被害だったのに、それよりも強い爆弾が使われたら……とぞっとしました。

　二日目は平和記念式典に出席しました。そこで私が一番印象に残ったのは、こども代表の平和への誓いです。帰ってきてからテレビで、「平和への誓い」は、こども代表二人を含めた小学6年生のこどもたちが言葉を考えていると知り、私たちも平和について考えて、未来を担っていかなければいけないと改めて思うことができました。次に千羽鶴の奉納と石碑の見学をしました。千羽鶴を奉納する場所にはすでにたくさんの千羽鶴がありました。学校のみんなが心を込めて折ってくれた千羽鶴だったので、どこに掛けるか迷いました。たくさんの千羽鶴があるということは、これまでそれだけたくさんの人が心を込めて鶴を折ったということで、思いはこうやって受け継がれていくんだなと思いました。石碑や像は、原爆で亡くなった人たちのことを残すことで忘れられないようにするために、遺された人たちが建てたものでした。平和記念公園の周りにはたくさんの石碑や像がありました。それは亡くなった人たちそれぞれに家族や大切な人がいたからだと思うので、大切な人を奪った原爆、そして戦争は許せないなと思いました。

　二日目の午後は、まずは本川小学校を見学しました。原爆が落とされたあと、当時の校庭は火葬場として使われていましたが、その一か月後には校庭で運動会をしていたというのを知って、同じ校庭でも状況によってこんなに使い方が違うんだと思いました。次は

おりづるタワーに行きました。折り鶴が折れない人もいたので、みんなに教えながら折りました。みんな「教えてー！」と言いながら楽しそうに折っていたので、禎子さんもこんな気持ちで鶴を折っていたんだろうと思いました。そして、その後、広島城を見学しました。城本体に入る前に地下壕があって、その地下壕は私たち演劇部がやった劇の舞台になっていた場所だったので、入ることはできなかったけれど、しっかりと見ておきました。この地下壕で女学生たちが学徒動員で働いていて、戦争のせいで働かなければならないような状況になったと思うと悲しくなりました。

三日目は、もう一度資料館を見た後に、被爆者の方から話を聞きました。本人以外の家族全員が亡くなってしまったと聞いて、とても辛かっただろうなと思うと同時に、そんな辛いことを話してくれたことに感謝しました。話の中で一番心に残ったのが、話をしてくれた内藤さんのお父さんが、「天皇陛下万歳！」と言って死んでいったということです。その当時は天皇陛下が絶対で、逆らえなかったし、戦争もやめられなかったので、一人ひとりが地位も何も関係なく、自分の意見を言えるようになれば平和に一歩近づくのではないかなと思いました。

今回の派遣で、戦争について見たり聞いたりして、戦争のことを、原爆のことを、より身近に感じられるようになりました。今ある当たり前の日常が奪われて、たくさんの人が亡くなる。言葉や数字で見るのは簡単でも、実際に資料を見ると言葉では言い表せないような辛さやひどさがありました。この経験を他の人にも伝えたいです。

湖北中学校　　川坂　晋矢

『広島派遣の感想』

今回、広島派遣という貴重な経験をさせていただき、沢山のことを学び、心に刻みました。コロナ禍でなかなか遠出もできずにいたので、4年ぶりに乗ることができた新幹線はとても新鮮なものでした。みんなで乗ることも初めてだったのでとても楽しかったです。初日の平和祈念館の見学では、亡くなった被爆者の写真やその写真を見ながら我孫子市被爆者の会の宮田さんの奥さんが「ただいま」と小さく呟いていたことに心が動かされました。その姿を見て自分自身が持っていた戦争への認識の甘さを考えなおさなければいけないと感じました。

平和記念資料館には言葉を失うほどの悲しさ、そして苦しさがありました。資料館を訪れる前はただ漠然と「原爆は恐ろしい」としか思っていませんでした。しかし、展示されている実際に写真や被爆者の方々の言葉を見ると「恐ろしい」という言葉では表現しきれないことや今までの目線では気づけないものがあることに気づきました。

「死体と間違われて、焼かれてしまうと思って寝なかった。」

この言葉は自分の想像を超えたものになりました。今は本当に軽い気持ちで寝ないなどということがあるけど、自分の身を守るために寝ないという選択肢を取るということは絶対にないですし、寝ることで死体と間違われる環境などでも決してありません。ただ、当時の広島にはそのような環境が広がっていたという事実を知り、唖然としました。

二日目は平和記念式典に参加させていただきました。テレビで見ることはあったけれど、実際に参加をし、肌で感じたその場の雰囲気は想像以上に厳かで、これからも世界の歴史として忘れられてはいけないものだと改めて感じました。沢山の国からきた来賓の方が式典に参列している姿をみて、やはり世界的にも忘れてはならない歴史だと思いました。この先の人生でも参列ができるかわからないと考えると貴重な体験をさせていただいたと改めて感じました。また、当日に流れていた被爆者の方からのメッセージや広島市児童生徒代表の言葉を聞いていて「戦争をしてはいけない」「戦争をなくしていかなければならない」と思いました。

式典後に平和記念公園を見学しましたが、当時はこの広大な敷地がすべてが住宅地であったのに、たった一発の原爆ですべてが消し飛んでしまったと思うと改めて恐怖を感じました。公園内にはたくさんの慰霊碑や像がありました。その中でも印象に残ったのが『原爆犠牲国民学校教師と子どもの碑』です。この像はぐったりした教え子を抱え、自らも被爆した女性の教師が、悲嘆にくれ空を見上げている姿を象ったものです。この女性の教師の年齢は自分たちとほとんど変わらないとお話をいただき、自分が同じ立場だったら生徒を守るという行動ができるだろうかと自問自答しました。

移動には路面電車を多く利用しましたが、初めて路面電車を目にし、初めて乗り、現代の広島の文化を感じました。資料館で見た原爆直後の広島市の風景から現代の姿にするまで、広島の人たちはどのような気持ちだったのだろうと疑問に思いました。その答えを昼食後に訪れた本川小学校の見学で見た気がします。本川小学校には原爆当時のままの建物が残っており、実際に壁に触ることができるなど生々しさを感じることができました。本川小学校のグラウンドは被爆直後、火葬場として使われました。ただ、その数か月後には運動会をそのグラウンドで行ったと資料に書かれており、純粋に「すごい」と感じました。それと同時に戦争に負けないという気持ちを多くの人が持っていたからこそ運動会が行われたし、今の広島の姿につなげることができたのだと感じました。

その後、おりづるタワーを訪れました。折り紙で鶴を折り、ビルの上から思いを込めて階下に落とすところがありました。すでに77万羽が落とされていると記録されており、それだけの人が平和への思いを込めて折り鶴を作ったのだと感じました。その後、広島城見学を行い、多くの景色を目にすることができました。二日目の移動は距離が長く、足が痛くなりました。しかし、沢山歩いた分、夕食に食べたお好み焼きは格別でした。広島の名物であり、一度は本場で食べたいと思っていたのでうれしかったです。鉄板を使って実際に自分で作るのは初めてだったし、広島焼きも初めてだったので楽しすぎました。

三日目に多聞院を見学しました。被爆した時も鐘楼が壊れることがなく、当時の姿を残しているとのことでした。実際に鐘を鳴らしてみると、心が落ちつきました。そのまま後ろを振り返り、爆心地の方を見たときに、一瞬でこの風景が消し飛んだと想像ができ、恐怖と切なさを感じました。

その後、二回目の平和記念資料館の見学を行いました。初日のときと違い、今まで学んできたものや目にしてきたものを思い浮かべたり、比較したりしながら見る事が出来ました。また、他の派遣団の仲間と意見を交換しながら見ることができたのでより深く学ぶことができました。そして、その中でも心に残った言葉がありました。それは、『生きる』の三文字です。今、自分たちは生きています。このことがどのようなことなのかを考えさせられました。戦時中だったからこそ、生きることは辛かったし、苦しかったのだと思いました。被爆体験講話でお話しいただいた内藤さんのお話にもその苦しさを感じました。内藤さんの家族は被爆をし、亡くなっていきました。その中でも内藤さんだけが無傷であったのは奇跡だとしか思えません。ただ、それと同時に心に大きな傷を負い、生きることに苦しさや辛さを感じたのではないでしょうか。そんな中で自分たちにお話をしていただけたことに感謝しています。被爆後、家族を失いながらも内藤さんを支え、養い続けた内藤さんの「お母さんの強さ」に強く心が動かされ、心に響きました。内藤さんのお話から原爆の恐ろしさ、その後の苦悩などをたくさん感じることができました。

この三日間を通して『原爆の恐ろしさ』、『命の尊さ』などたくさんのことを学びました。そして、今まで知らなかった事実がたくさんありました。今回の広島派遣で学んだことを広島リレー講座や学校の文化祭で原爆の恐ろしさ、苦しさを伝えていけるようにしたいと強く思いました。

湖北中学校　　ジャシンリヤナゲ・あゆみ

広島での三日間はたくさんのことを学び、感じていろいろなことを考えました。

私自身あまり戦争についてよく知らなく、教科書などでしか触れておらず、平和とは何かと考えても難しくあまり考えてきてはいませんでした。

三日間で私が一番に感じたことは「恐ろしい」です。ただ、言葉では表せない気持ちでもありました。

平和記念資料館での見学時はとても心が痛めつられるような悍ましい光景でした。被爆をされた方や被爆した物が石化したかのように時間の流れがとまり、遺品一つ一つが当時の惨状を物語っているようでした。自分よりも小さい子のボロボロになった衣服、血が付いたものもありました。実際に目の当たりすると自分がその場にいるようで、当時被爆した直後にそのボロボロな衣服で親を捜し歩き続ける様子が脳裏に浮かび、胸がキュッとなりました。

一番心に残った言葉は、

「死体と間違われてしまうと思い、寝なかったんだ」

という言葉です。被害を受け、体を痛め、少しでも体を休めようと寝ているときに焼かれてしまうと考えると、体だけではなく恐怖心から心を痛めてしまったのだろうと思いました。

そして核の恐ろしさを再認識しました。核は怖いものとはわかっていましたが、資料館を見学して、核は『大事な人、日常生活を一瞬にして奪ってしまう恐ろしいもの』と考えるようになりました。特に一番びっくりしたことは、爆心地から半径3，500メートルまでの地域にいた人も火傷を負い、周辺の地表面の温度は3，000度から4，000度にも達していたことに驚きと恐怖を感じました。

そして、平和記念公園の見学で自分の心に残ったのは「原爆供養塔」で最初に見たときは円状に広がった土盛りの頂点に石造りの相輪一基が据えられていてきれいだなと感じました。しかし、その説明を聞いて複雑な気持ちになりました。そこでは原爆の被害で亡くなった人たちの死体が運ばれて火葬されていたのです。一見キレイだと感じられる場所にも悲しい歴史があったのです。

原爆の被害を受けた建物の中には原爆ドーム以外にも川を挟んで向かいに建っている本川小学校という建物もあります。そこには被爆しながらも当時の様子が残された唯一の建物を資料館として公開していました。その資料館の見学をしていたときに心に

残った事実がありました。それは本川小学校のグラウンドが被爆直後は火葬場として使用されていたにもかかわらず、数か月後にはそのグラウンドで運動会が開催されたというのです。資料には「用具もろくにない小運動会をした時の感激は、大変なものであった。」と書いてあり、当時の人たちは子供たちも大人たちもみんな前へ進み、復興へ向けて前進している証だと感じました。

多聞院の見学で、8時15分になる鐘は重みのある音に聞こえました。多聞院の鐘楼は原爆の爆風でも吹き飛ぶことがなく、当時のままの姿で現代に残っています。鐘を鳴らした後に、後ろの景色を見ると77年前、ここは火の海になっていたけれども、今は緑がいっぱいで人も当たり前の様に生活している姿があり、平和を表しているように感じました。多聞院で亡くなられた母と子にもお祈りをすることができて良かったです。

そして被爆者による体験講話では、ここまで見て、聞いて、感じたことを活かすときだと思いました。一つ一つがリアルでとても詳しく話をしていただき、自分をお話しいただいた内藤さんの立場に置き換えて話を聞くとより恐怖感が募り、耐えられない気持ちになりました。内藤さんの「一人一人が正しいといえる社会」という言葉を聞いた時、私たちがみんなの意見に耳を傾けることが平和への一歩になるのだと思いました。

また、内藤さんの話を聞くことで、私たちが今生きていることがどんなにすごいことか、大切なことかを改めて気づくことができました。

内藤さんの気持ちを知り、そして内藤さん以外の被爆者の方々の思いを私たちが受け継いでいかなければならないと感じました。

被害に遭った方々が年々、少なくなっているのが現状です。それがきっかけで戦争の愚かさ、平和の大切さを語り継いでいく人がいなくなり、人々が忘れ、風化されてしまわぬよう、自分からも行動したいと思いました。

この三日間は驚き、恐ろしさなどを感じ、自分で問いを見つけ、いろいろと考えさせられました。改めて戦争に対しての意識が強くなりました。

平和とは何か。広島に来る前も、このことについて考えました。派遣に行く前も行った後も『平和』についてハッキリとした答えは出ていません。しかし、派遣が終わった後の帰り道。母との何気ない会話の中で、三日間を通して何を見たのか、何を感じたのか、心の中によみがえりました。母と何気ない会話こそが平和の一部だと心でしみじみ感じました。

平和とは何か？の答えを探すため、戦争が二度と起こらないよう、私が学んだこと、感じたことを活かし、後世につなげていきたいです。

布佐中学校　　菅　光祐

僕の目の前で女の人が倒れた。広島派遣三日目のことだった。平和記念資料館での出来事だった。過去の人々の過ちは現代の人の心も苦しめる。それをその場にいた誰もが感じることのできる出来事だった。

僕はもともと歴史に興味があった。だからと言って社会の成績がずば抜けていいわけでもないが、それなりに知っていることは多い方だと思う。ある日、学校で「広島派遣」というものの説明を先生から受けた。最初は正直行こうか迷った。もちろん広島と長崎に起こったことは知っているし、もっと色々なことを学んでいかなければとも思っていた。でもどこか暗い気持ちになると思い、なかなか行く気になれなかった。しかし、広島で何があったのか、本当のことを知りたいという気持ちが勝ち、先生方の支えもあり、広島派遣に行くことを決意した。

今回の派遣を通して僕が一番感じたことは、ほんの一瞬、ほんの些細なことでも、それが少しでもズレれば、物事や歴史は変わってしまうということだ。最初に行った国立広島原爆死没者追悼平和祈念館。ここではたくさんの原爆被害者の家族写真などが飾られていた。家族写真と聞いたら、その先も何年、何十年と家族で見合って思い出に浸れるものだと思うし、きっとこの人たちもそれを望んでいたのではないかと思う。そう考えるとどこか悲しい気持ちになった。次に訪れた平和記念資料館。ここでは原爆が残した生々しい傷跡を感じた。特に、実際の写真や当時のイラストは、よく映画などで見る死体とは違う生々しさと惨さが強く、言葉にならないほどだった。その中にあった一枚の写真には体中に包帯を巻かれ並べられた人たちが、カメラに向かって何かを訴えているようであった。普通、このような場面では「助けてくれ」、「生きたい」という言葉が出てくるのだろうが、僕にはどうしても「苦しい」、「早く殺してくれ」と訴えられているようにしか見えなかった。たった一枚の写真なのに、ここまで考えさせられることが自分でもびっくりだった。また、次の展示フロアにはいろいろな子供たちの服と顔写真、そして被爆者の方々の言葉が展示されていた。その中の一つに

「死体と間違われて焼かれてしまうと思い、寝なかったんだ」

という少年の言葉があった。この言葉を見たときに、僕は衝撃のあまり声が出なかった。みなさんは一度でもこう思ったことがあるだろうか。『もしかしたら今夜、自分の友達、学校の先生、家族。今、隣にいる人に死体と間違われて焼かれてしまう。殺されてしまうんじゃないか』と。そんなこと僕にはもちろんないし、ありたくもない。しかし、この少年は

当時その恐怖に縛られ、夜もまともに寝ることができなかった。自分の仲間であるはずの人間によってもたらされた原爆によって、味方であるはずの日本人、友達や家族に対しても恐怖を覚えてしまう。こう考えると原爆がどれだけ恐ろしいものなのかを改めて知る事、そして考える事ができた。

派遣終了日である三日目。僕たちは被爆体験講話を受けた。ここでは写真などでは感じることのできない当時の人々のとった行動まで知ることができた。その内容は衝撃的なものであった。今回話をしてくださった内藤さんはたまたま防空壕の前でベンケイガニを獲ろうとしゃがんだ際に被爆したそうだ。運よく防空壕の中へ飛ばされそうだが、他の家族は多くの被害を受けたという。逃げるときに父の手を掴むと皮がずるむけ、それでも父は痛いとも言わず、ただ「すまんのう。すまんのう。」と言ったそうだ。二人きりになった母も体の異変を隠し、最後までわが子を思い大切にしたという。この話を聞いて僕は涙が出てきた。

今回の派遣中、資料館などを見て一番恐ろしいと思った話を一つ紹介したい。それは「三つ目の原爆がすぐそこまで来ていた」ということだ。1945年5月、アメリカは原爆を日本のどこに落とすかを考え、新潟、横浜、京都、広島、小倉に絞った。この中で2回、京都が最有力候補に挙げられたが、当時のアメリカ陸軍長官が京都をよく知っていたため猛反対。その後、京都は空襲も外れた。東京などは空襲がひどかったのもあり、広島、小倉が目標となった。そして予備地として長崎が追加された。8月6日8時15分に広島。そして8月9日小倉に投下しようとしたが、前日近くで空襲があり、煙で視界が悪くなるトラブルが発生。予備地であった長崎に向かった。8月14日、トールマン大統領は「日本が降伏しないと三発目を落とすしかない」とイギリスの大使に発言し、場所も東京に決まっていた。しかし、その次の日。日本が無条件降伏を受け入れ、三発目は幻となり、太平洋戦争は終結した。もし、当時の陸軍長官が京都のことを知らなかったら…。もし、日本があと少し降伏しなかったら…。今の自分たちはいなかったかもしれない。同じ過ちを繰り返さないように今の世代が未来につなげ歴史の歯車を守る必要がある。

布佐中学校　　野尻　千結

　私は、広島派遣を通して「平和」とは何か今まで以上に考え、感じる事ができました。私が今回感じたことは主に三つあります。

　一つ目は「核兵器の恐ろしさ」です。実際に原爆ドームを見たり、資料館に行ったりする事で今までテレビやインターネットでしか見たことがなく、どこか遠い物のように感じていた原爆のことを身近なものとして感じ、考える事ができました。原爆ドームは今にも崩れてしまいそうな見た目をしていて、大きく立派な建物を一瞬でこの様な状態にしてしまう原爆に恐怖を覚えました。また、私は派遣に行くまで国や国民を守る為に抑止力としての核を持つことは、不安ではあるけれども安全保障の為には仕方ない事なのかな…と考えていました。しかし、77年前広島や長崎で被爆し亡くなった方、被爆した家族や恋人、友だちを探しに行き入市被爆された方、当時は何とか助かっても後遺症や差別に苦しんだ方、胎内被爆された方、国外でも核実験により被爆し、十分な補償も受けられず辛い思いをされた方などの思いに触れ、こんなにも多くの人を苦しめる核兵器はたとえ抑止力としてでも持つことは許されないことだと改めて感じました。

　二つ目は「命の大切さ」です。被爆体験講話をしてくださった内藤さんは、たまたま防空壕の中に吹き飛ばされたことで助かったのだと教えてくださりました。この話を聞いて私はあの時代を生きてこられたのは奇跡なのだと感じました。生きることも難しい時代の中を過ごし、繋いできてくれたこの命を私は大切にしていかなければと思いました。今、世界では年間で約80万人の方が自殺で命を落としてしまうそうです。私はこのこと知った時、77年前、夢や希望を持ちこれからの人生を楽しみにしていたにも拘わらず、原爆によって一瞬で未来を奪われてしまった人がいるのに、自ら命を奪ってしまう人が沢山居ることに悲しくなりました。また私はみんなに伝えないといけないと思った事があります。それはすぐに「死にそう」といった言葉を使うのは良くないということです。多くの人は暑かったり大変だったりすると「死にそう」という言葉を使うと思います。実際私も使っていました。思い返すと自分が情けなく感じました。簡単にこんな言葉を使うのはいけないし、生きたかった人たちに申し訳ないと思いました。身近な人たちからこの話をして、軽い気持ちで「死にたい」などの言葉を使う人減らし、自分の命、そして周りの人の命を大切にしてもらいたいです。

三つ目は「正しいことを言うことの大事さ」です。被爆体験講話で内藤さんのお父さんは「天皇陛下万歳」と言って亡くなったと仰っていました。最後まで戦争は嫌だと言えずに亡くなってしまったお父さんの話を聞いて人間の怖さを感じました。戦争のない平和な世界を作っていくためには、一人ひとりが正しいと思ったことをはっきりと言える社会、少数意見であったとしても正しい意見に必ず耳を傾ける社会を作っていかなければならないという内藤さんの言葉がすごく印象に残りました。戦時中は正しい事を言っても非国民だと言われてしまったそうです。しかし、今私たちは意見をいうことができます。人によって正しさは違いますが、「戦争をしてはいけない」という意見は皆同じなのではないでしょうか。正しいことを多くの人が言葉にしていくことで、世界は少しずつ変わります。私は被爆体験講話をはじめ、全ての活動を通して沢山の人と協力し、意見を交換し合い、平和な社会の実現を目指したいと思いました。

私はこの三日間の沢山の貴重な体験を通して、平和とは戦争や差別がなく、人々が互いを認め尊重し合えることだと考えました。私たち、日本人は生まれてから戦争というものを身近に感じた事がある人は少ないと思います。しかし、今年に入りロシアとウクライナが戦争を始め、私たちにも戦争という存在が近づいてきました。被爆体験講話をしてくださった内藤さんは、被爆体験を語ることは当時のことを思い出してしまうのでなかなか話せずにいたそうです。それでも、「被爆者の数が減って77年前の出来事が風化されてしまうのでは…」と思い、勇気を出して話してくださったそうです。そんな苦しい思いを抱えながらも語ってくださった話を、私たちは伝える義務があると思います。被爆国として今の「平和」とは言いがたい世界にできることは「伝える事」です。私は今回聞いたり、学んだり、感じたことを自分の中だけで終わらせるのではなく、まずはクラスメイトや家族など身近な人から伝え「平和」に対する思いを広げていきたいです。

湖北台中学校　榛葉　央河

8月6日午前8時15分、広島に一つの原爆が落ちた。その原爆は一瞬で多くの人の尊い命を奪った。広島の人からしたらいつも通りの朝だったと思う。朝ごはんを食べていたかもしれないし、会社、学校に行くところだったかもしれない。そんな広島の人の日常を原爆が壊した。中には、小さい赤ちゃんや虫や動物もいたと思う。赤ちゃんも虫も動物も人間と同じように尊い命をもって生きている。原爆は何十万人、何百万匹の生き物の尊い命を奪った。それは覆ることのない悲しい事実である。

僕は広島に行く前に本や資料、インターネットなどを使って、原爆について調べ、理解したつもりでいた。「こんな悲しいことがあったんだな。かわいそうだな。」とその時は感じていた。しかし、実際に広島に行った一日目、資料館などを見て、僕の原爆に対する印象が大きく変わった。あの一瞬がもたらした不幸と悲劇。それは自分が想像していた以上にひどいものだった。原爆を知らない人からしたら、あの時見えた赤っぽいような朱色っぽいような色の光は、鮮やかでとてもきれいなものに見えたかもしれない。そんな原爆は広島に目を背けたくなるような被害を与えた。やけどを負い、水が欲しくて川に飛び込んで亡くなった人、皮膚がただれ、体もふらふらした状態の人、ガラスやがれきが全身に突き刺さり血だらけで助けを求める人。本当にこんなことが起きたのかと信じたくない気持ちでいっぱいになり、実際に自分が受けたわけではないが、展示されている遺品を見て、心がえぐられるような気持になった。

資料館で見たものの中で「魂の叫び」というものが僕の心を大きく動かした。被爆者の方々の被爆後の叫びや思いをつづったものである。その叫びの中にはひどいものや憐みの声などがあった。被爆前に交わした最後の会話を叫びとしてつづっていた人もいる。兄弟とけんかをして、その時言ってしまった一言が最後の言葉になってしまった人がいるかもしれない。謝れないまま死に別れてしまい、ずっと後悔の念をもって過ごすことほど悲しいことはない。もし、自分が同じ状況になっていたら、謝れなかった自分を恨むだろう。そして悔いるだろう。どんな理由であろうとケンカをした自分をばからしく思えてくるだろう。この辛さにきっと耐えられない。

「死体と間違われて、焼かれてしまうと思い寝なかったんだ」

これも心に響いた魂の叫びの一つである。

小さい子がこんなことまで考え、怯えながら生活していた当時の様子が分かる。今では想像することができないくらい、過酷な状況にあったということが分かった。『眠くなったら寝る。』そんな当たり前のことができなかった。怖くて、怯えて、寝られない。今じゃ考えられないことが当時にはあったということを痛感した。

他にも実際の写真や様子を描いた絵などを見ましたが、やはりどれを見ても感じることは、「恐ろしい」、「悲しい」、「見たくない」だった。どれくらい過酷で辛い状況だったか、今、僕の言葉では理解できないと思うし、すべては伝わらない。言葉では表すことができないくらいひどい状況であった。世界からこんな考えをする人や辛い思いをする人、こんなひどい景色を見る人がいなくなってほしい。その思いに駆られた。

二日目、人生の中でも滅多に経験することのできない平和記念式典への参加を果たすことができた。前日に見た資料館とはまた違う雰囲気で、前日に見た原爆の恐ろしさや被爆者への思いを持って、神聖な雰囲気の中で被爆者へお祈りすることができた。

三日目、実際に被爆した内藤さんのお話を聴くことができた。実際に残された資料を見るのとまた違い、一つ一つの話に重みを感じた。内藤さんのお話の中で印象に残ったことがある。内藤さんのお父さんの話である。内藤さんのお父さんは内藤さんのすぐそばで被爆した。内藤さんは爆風で防空壕へ吹き飛ばされたため、火傷などを負うことはなかったが、防空壕から這い出たときに目に飛び込んできたのは真っ黒こげになった父親の姿であった。内藤さんの父親は避難先の防空壕につくなり、倒れこみ数日動くことができなかったそうだ。そして。8月10日。おもむろに立ち上がり、防空後の外に這い出て仁王立ちをすると、

「天皇陛下ばんざーい」

と叫び、そのまま息を引き取ったそうだ。

どうして最後まで戦争に反対できなかったのか。せめて最後くらいは戦争なんてやりたくなかったと言えなかったのだろうか。あの時、内藤さんのお父さんが言えなかったからこそ、これからは正しい意見や自分の主張を言えるような社会にならなきゃいけないと思った。

僕は広島に来るまで、家族といることは当たり前だと思っていた。でも、違った。家族といるのは幸せなことであり、当たり前は奇跡の上で成り立っていることがわかった。そもそも戦争は、国同士が和の心をもって手を取り合えば起きないはず。だからこそ、この貴重な体験を生かして、和の心を大切にし、平和の尊さ、命の大切さを多くの人に伝えたい。そして、家族がいることのありがたみを知ってほしい。もう二度と多くの命が奪われることがないことを心から願います。

湖北台中学校　　佐野　裕梨

　私は、今回の広島派遣を通して、原爆への考え方が変わりました。また、私の人生観が大きく変わったように思います。

　私は元々、原爆についての知識が全くと言えるほどありませんでした。広島派遣に参加することが決まってから、自分なりにたくさん調べ、原爆について分かった気でいました。原爆は良くない、日本が戦争をしないというのは正しい。それが私の考えでした。しかし、実際に広島に行って、私の考えがどれだけ浅はかなものだったのか、自分の愚かさに気づかされました。原爆は私が思っていた何倍も残酷で、悲惨なものだったのです。

　老若男女関係なく、ボロボロに焼け焦げた人々、死体となった子供を抱きかかえ泣き叫ぶ母親の姿、治療が行き届かず息絶える人たち。多くの悲惨な写真と共に綴られていた言葉も、心が痛むものばかりでした。

「死体と間違われて焼かれてしまうと思い、寝なかったんだ」

『寝なかった』のではなく、『寝られなかった』のではないでしょうか。隣で次々と死体となった人たちが焼かれていく。そんな光景を目の当たりにして、死体と同じくらいボロボロな自分は焼かれてしまうのではないか。という恐怖から寝たくとも寝られなかったのだと思います。この少年は、当時中学1年生でした。私たちと変わらない歳の子が、こんなに辛く、苦しい思いをして亡くなっていったという現実は、決して目を背けてはいけないと思います。

　また、被災地にいたとある写真家の言葉があります。

「ほほに涙が伝い、ファインダーを通す情景がうるんだ。まさに地獄だ。」

　私は、地獄を見たこともなければ、どんなものなのかも知りません。しかし、広島で多くの写真、メッセージ、被爆した方のお話を聴いて、地獄というのはまさにこのことだと強く感じました。

　こういったたくさんの写真などを資料館で見て学ぶことができました。資料館で学んだことはたくさんありましたが、私が今回の広島派遣で一番貴重な経験だと感じたのは、実際に原爆被害に遭った方のお話を聴けたことでした。

　私たちがお話を聴かせてもらった内藤さんは、原爆によって家族を失い、一人残されたと話していました。一気に家族を失うこととなったこの残酷な出来事を思い出すのは苦しく、辛い。だから、今まで自分が体験したことを周りに話すことができなかったと

語られていました。しかし、ある日、天にいる家族から「お前は今、何をしているんだ。いつ語るんだ。」という声が聞こえた気がして、勇気を出して被爆体験講話の活動を始めたと話されていました。内藤さんは仰っていました。
「是非、被爆の残像というものを、みんなに伝えてもらいたいんです。」
　内藤さんは何度も何度も繰り返し訴えていました。多くの人に伝えていって欲しいと。私は広島派遣に参加するため、学校で面接を受けました。そのときに私が目標としたのが、実際に原爆について学び、感じて、その全てをまずは全校生徒に、そしてこの先の伝えられる機会すべてを使ってでも、より多くの人に一人でも多くの人に伝えることでした。
　広島派遣を終えて今もなお、この思いは変わっていません。私は今回学ぶことのできた全てを語りついでいくと決めました。辛く苦しい思いをしても勇気を振り絞って語り継ごうとしてくれている人がいる。だからこそ、私たちができることは全力でやるべきだと思っています。私の伝えるという行動に意味がある、何かが変わると信じて、これから頑張って精一杯語り継いでいこうと思います。
　今回の広島派遣を通して、本当にたくさんのことを学び、感じ、自分の考えを持つことができる貴重な経験になりました。学校代表として他校の人たちとも関わりを持てるいい機会にもなりました。
　原爆は、戦争は醜い。争いのない平和な世界は私たちがつくっていくものです。今こそ平和を築くために努力するときです。すべての人と手を取り合い、平和への第一歩を踏み出せたなら私たちの望む未来はそう遠くないはずです。無理かどうかは私たちにかかっています。誰もが平和に過ごせるように語り継いでいきます。
　世界平和を心から願っています。

久寺家中学校　松浦　篤志

我孫子市では、昭和60年12月3日に平和都市宣言をしています。市では核兵器の恐ろしさと被爆者の苦しみを全世界の人々に訴え、同じ惨禍を繰り返さない為にもこの宣言をしたそうです。

今回、私は市の平和事業として広島派遣に行かせていただきました。

広島派遣が決まった後、私は、原子爆弾を落とされた広島について調べてみました。そこには熱線と爆風によって亡くなった人々、放射能の後遺症で苦しむ人々、原爆の恐ろしい威力など沢山の目を覆いたくなるような記事が沢山ありました。私はそれを調べたことでどこか広島についてすべて知った気になっていました。

事前説明会では、市長をはじめ先輩方に「実際に行って自分自身で感じてきて下さい」という、お言葉を頂きました。

実際に広島に行き、原爆ドームの前に立った時、その言葉の意味がよくわかりました。テレビ、ネットだけでは感じられない苦しさや痛みが心に湧きあがりました。むき出しになった鉄筋が原爆のむごさを物語っていました。それは77年前の写真となにひとつ変わっていませんでした。建物の中にいた人々は、周りにいた人々はどうなったのか。苦しい叫び声が聞こえてくるようで、情景を思い浮かべるだけで夏なのに吹く風が、寒く感じました。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では原爆によって亡くなった方々の写真が掲載されていました。罪のない人々が一発の原爆によって命を落としました。14万人もの犠牲があったのです。事前に調べて分かっていた数字でしたが、実際に被害をうけた場所にきて苦しんでいる人々の写真を見ていると辛く苦しい気持ちになりました。

平和記念資料館では、写真の他に、被害をうけた人々の衣類や言葉、建物、三輪車などがありました。残酷な絵や写真に心が震えました。両手の皮膚がはがれて爪のところでぶら下がっている男の人の絵や、赤ちゃんの死を受け入れることができず、生きているかのようにあやす母の絵がありました。なぜこんな恐ろしいことが起こってしまったのか。人の世とは思えない地獄絵が資料館にはひろがっていました。

私の印象に強く残っている資料があります。

『衝撃的な光景に思わずカメラを構えた。二十分ほどためらった後、涙を流してシャッターを切った』という文章のみのプレートです。

その言葉で、いろんな情景が目に浮かびます。
二十分もためらい涙なしではシャッターが切れない情景。どんなに酷い光景だったか。写真は見なくともカメラマンの気持ちも苦しいほど伝わってきます。実際にその地に立ってみないと感じる事の出来ない緊迫感と心苦しさ、恐ろしさが伝わってきました。
　派遣二日目では平和記念式典に粛々とした気持ちで参列させていただきました。
平和宣言で広島市長の松井一實さんの『他人の不幸の上に幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ自分の幸福もあるのだ』という言葉が私の心に響きました。自分だけが幸せなのは本当の幸福とはいえず、他人と分かち合える幸せこそ本当の幸福だといえるのです。また、原爆死没者慰霊碑の前で祈りを捧げた時、約14万人の思いを感じ、『平和を繋げなくてはならない責任』が自分にはあると強く感じました。
　核保有国のロシアが非核保有国のウクライナに侵攻し、『核兵器がないと平和が維持出来ない』という声が大きくなってきています。
　それがどんなに、残酷で辛く悲しい事態になるのか、広島の被爆の跡を見て、知ってもらいたいと心から思いました。
　派遣三日目には6歳で被爆した内藤さんの体験講話を聴かせていただきました。実際に体験した方の話を聴くことでより、原爆投下のあった8月6日の日をリアルに感じました。
　8月6日の朝7時ころ、いつもの警戒注意報が鳴りやみ、内藤さんは家を出たそうです。たまたま防空壕近くを歩き、弁慶ガニをみつけ拾おうとしたその時です。原爆が投下され、内藤さんは爆風で防空壕に2メートルほど吹き飛ばされました。そのおかげで原爆による被害は少なくてすんだそうです。その後、家族と合流し避難しましたが、みな被爆し亡くなってしまったそうです。いつもの日常が一瞬で奪われてしまったのです。親しい人々が次々に亡くなっていくのを身近で見て、さぞかし絶望的で苦しかったかと思います。思い出したくない辛い思い出を私達に話してくださり本当に有難く思いました。
　私は派遣中、何度も平和を続けるにはどうすればいいか考えました。それは平和の誓いにもあったとおり本当の強さを持つことが大切だと思います。思いやりを持ち相手と分かち合える力です。そして一秒でも早く平和な世の中が訪れるように今後、一人でも多くの人に核の恐ろしさ、被爆の惨状を知ってもらえるような活動をしていきたいと思っています。

久寺家中学校　　中濱　陽香

『広島派遣を終えて』

　私は広島派遣に行く前は平和について深く考えたことがなく、ぼんやりとしたイメージでした。しかし、派遣生徒として資料館を見学したり、被爆された方のお話を聴くうちにだんだん『平和とは何か』がわかってきたような気がします。

　まず国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学をしました。館内には被爆前に撮影された家族写真などが展示されていました。原爆によって写真に写っている家族の絆が引き裂かれてしまったことを考えると心が苦しくなりました。館内を進むと大きなスクリーンがありました。そこには被爆によって亡くなられた方の写真が次々と映し出されていました。その中に今回一緒に行かれた宮田さんの旦那さんの写真が映し出されました。その時に、

「元気そうなお顔でよかった。」

「また来るから待っててね。」

と話しかける宮田さんの姿を見て、とても愛されていた方なんだなと思ったと同時に、原爆で亡くなったすべての人が誰かに愛されていて、一発の原子爆弾によりその愛も奪われてしまったことに気づき、改めて核の恐ろしさを実感しました。

　次に平和記念資料館の見学をしました。昨年派遣生徒であった先輩に話を聞いて想像していたもの以上に悲惨で目を背けたくなるような展示がたくさんありました。皮膚が垂れている絵、目玉を手で受け止めている絵、火傷を負った方の写真どれも想像できない、想像したくないような展示がたくさんある中で私が印象に残っているものが二つあります。

　一つ目は被爆にあった方の言葉です。

『すぐに「敏子だ。」とわかった。』

という言葉です。ひどい火傷を負っていてもすぐにわかる家族の絆。しかし、もう亡くなってしまっていることを信じたくないが受け止めなければいけない絶望感を本人は感じていたと考えると苦しい気持ちになりました。二つ目は「N家の崩壊」という展示です。この展示は被爆後どんどんと崩れていく家族の絆のお話でした。生き残った人たちの幸せも原爆が奪ってしまったという事実から私も目を背けたくなるくらい苦しかったのに、

被爆者の方はどれほどつらかったのか、私たちには考えられないほどだったと思うと心が痛みました。

次の日に平和記念公園の見学をしました。見学の中で印象に残ったのは市長さんのお話です。「たくさんの遺体を伝染病が発生する前に火葬した。生き残った人のためにもそれが一番良い決断だった。」と聞いて複雑な気持ちになりました。

三日目に被爆者の方のお話を聞きました。被爆者本人から聞く言葉はとても重く感じられました。生き残っているという使命のもと思い出したくないような辛い記憶を語ってくださいました。

私は三日間、平和や核の恐ろしさを見て学びましたが、「平和とは何か」の答えははっきりと出ませんでした。しかし、派遣生徒として学び、考えたことが二つあります。一つ目は、日本の被爆の経験についてです。この世界から核が消えても、被害者の方の心の傷は消えるわけではない。でも、日本の被爆の経験を私たちは無駄にしてはならず、核をなくすために日本が唯一の被爆国として世界に伝えなければいけないということです。二つ目は、当たり前の幸せです。当たり前の毎日が幸せであること。また、死にたくなるくらい嫌なこともあるけれど、簡単に「死にたい」と思うことは、生きたくとも生きれなかった被爆者の方に失礼なことであり、毎日を精一杯生きなければいけないということです。これらを周りの人に伝えて、一人でも多くの人が平和、核について考えてもらえることができたら、私たちが代表として広島派遣に行った意味になるのではないかと思いました。

白山中学校　　山口　桜佑

『戦争と平和』

　僕は広島派遣に行って、行く前までの自分がどれほど戦争について無知だったのかということを知ることができました。この三日間を通して平和に対する考えは大きく変わりました。このような貴重な経験をさせていただき本当に感謝しています。

　まず一日目の最初に平和記念公園を訪れました。そこで見たのが原爆ドームです。今まで平和について学ぶ際に写真では見たことがありました。しかし、実際に自分の目で見たことにより原爆の恐ろしさやその被害がより鮮明に感じることが出来ました。

　また、この原爆ドームは元々広島県産業奨励館という名前の建物でしたが原爆の被害を受けて、今の原爆ドームという名前になりました。この際に、原爆ドームを残そうとする動きがあったことを知り、辛い事実でもそれを残そうとする人がいたのだから、この建物をこれからも残していかなければならないと感じました。

　その後、広島原爆死没者追悼平和祈念館に行きました。そこで特に印象に残ったのが、たくさんの家族の写真です。家族で楽しそうにしている写真を見て、思わず涙を流してしまいそうになりました。そこで初めて当たり前のように暮らしていた人々の生活を原爆が奪ってしまったのだと痛感しました。

　次に、二日目には広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に出席しました。そこでは二つのことが印象に残りました。一つ目は外国の方も多く参加していたことです。僕たちが座った席の近くに外国の方がたくさんいました。それだけ世界中が平和や、唯一の被爆国の日本に対して意識しているということだと思いました。二つ目は小学生二人による平和への誓いです。二人の堂々とした姿と誓いの内容がとても印象に残っています。なかなか参加する事が出来ない式に参加することができ、とても貴重な経験になりました。

　次に本川小学校平和資料館を訪れました。ここは実際に被爆した鉄筋コンクリートの建物です。鉄筋コンクリートでもボロボロになってしまっていて、再び原爆の恐ろしさを感じました。しかもここでは原爆ドームと違い、実際に建物に入り、自分の手で触れることが出来るので、より一層深く感じることが出来ました。ここで特に印象に残ったのが、被爆後に行った運動会についてです。被爆後に火葬場のようなものとして校庭が使われてい

ましたが、その後学校が再開されていくとその校庭で運動会を行ったのだそうです。これを聞いて、僕は最初、当時の人たちにとって嫌なのだろうと思っていました。しかし、その写真や当時の教頭先生の手記などを見ていくうちに、運動会をする時までにどれほど大変な思いをしてきたのか、運動会が出来ることが、どれほど嬉しいことなのかを知ることが出来ました。

その後、広島城を訪れました。その天守閣から見た景色はとても綺麗で、本当にここに、たった77年前に原爆が投下されたのかと疑ってしまうほど栄えていました。そこにはたくさんの人の努力があったのだろうと感じました。だからこそ、原爆の事実をしっかりと残して伝えていかなければならないと感じました。

次に三日目は、広島平和記念資料館を訪れました。ここには一日目にも訪れましたが、二度訪れたことから複数の観点によって様々なものを見てたくさんのことが感じられました。その中でも特に印象に残っているのが、資料の横に書いてあった「寄贈者の名前」です。僕は資料館には誰のものでもなかったものが置かれていると思っていましたが、これを見てご遺族の方が原爆の事実を伝えようとする行動に対して、とても勇気がいることですごいなと感じました。また、思わず目を背けたくなるような資料もありましたが、三日目にはそれを受け止めなければならないと感じ、目を向けられるようになりました。

その後は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に行き、被爆者の内藤さんのお話を聞かせていただきました。時折、言葉に詰まりながらも懸命に話をしてくださっている姿がとても心に響きました。話の中で特に印象に残った言葉があります。それは、「原爆が憎い、戦争が憎い」という言葉です。この強い意志が感じられる言葉を心に強く思い続けていたそうです。しかし、語ろうとすると辛い過去を思い出すために今まで語れなかったというのです。このことからそれほど被爆した方々には辛い過去であり、場面が目に浮かぶような話の具体的な内容から、それほど鮮明に記憶に残っているのだと感じました。また、このお話で知ったことをこれから風化させず、伝えていかなければならないと感じました。

今回の広島派遣を通して、平和というものについて少し理解が出来たと思います。僕は平和な社会を実現するためには、一人一人が戦争や原爆について理解し、平和について考えていくことが一番大切だと思いました。そのために僕は、広島派遣中学生として培った経験と共に、被爆者の方やご遺族の方から受け取った平和への思いを込めて、後世へと紡いでいきたいと思います。 1945年8月6日8時15分。この原爆を忘れることがないように努力し、派遣中学生としての今後の活動にも積極的に活動していきたいです。

白山中学校　　田中　千尋

今年の夏、私は我孫子市の公立中学校の二年生から選ばれ、広島派遣団の一員として広島を訪れた。被爆関連施設や被爆体験講話などを通し、まず自分自身が戦争や核兵器の恐ろしさや平和の尊さを知ること。この体験を自分たちの世代や次世代に伝えていくことが目的である。

まず、広島に行きたいと思ったきっかけは自分の祖父母が戦争を体験している世代で時々当時のことについて話を聞くことがあったからである。その時は、「戦争は昔のこと」と思い込んでいた。しかし、今年に入りウクライナに対してのロシアの軍事侵攻もあり、「戦争」について知りたいと思ったのが広島に行く発端となった。

一日目、広島について、まず目についたのは原爆ドームだった。ネットや教科書などで何回も見たのと生で見るのとではやはり感じるものが違った。原爆ドームという建物に沢山の人たちの『平和』への思いが強く込められていることを感じたのだ。そして、平和祈念館の見学後、平和記念資料館に行った。その資料館にはたくさんの写真や絵、当時のものや遺品などがあり、最初に感じたことは「想像以上」。そして「恐ろしい」であった。写真の隣には一言の言葉があった。その中で一番印象に残った言葉は、「死体と間違われると思い、寝なかったんだ。」という一言だった。その一言で当時、周りを見渡すと遺体ばかりで生体も遺体と区別がつかないほどひどい有様だったのだなと思った。

また、『N家の崩壊』というものも目に留まった。Nさんは被爆によって苦しみだした父親をどうすることもできなかった。九度も病院を転々とし二度の大手術もしたが父親は治らず、市役所からはその症状さえ疑われ精神異常者にされた。Nさんは何とか原爆病院に入院できたが、何の治療も受けられずに家に帰ることになった。1967年、Nさんは両足の太ももに百数十の傷跡を残して亡くなった。22年間の長い闘病生活の中で、病苦から逃れるために、カミソリで切り裂いた傷跡そのものであった。「原爆症がうつる」と嫌われたり、少し働いてもすぐ疲れて仕事を休めば『ブラブラ症』と冷たい目で見られるなどの原爆症に対する無理解に被爆者の方々はNさんのように苦しみ、精神的に追い詰められていた。逆に責めた人たちも、「自分がなったらどうしよう」など原爆症への恐怖、不安が掻き立てられて出た言葉だったのかもしれない。それだけ、被爆者だけでなく、周りの人たちも追い詰められていたのだろう。

二日目は朝早くからホテルを出発し、平和記念式典に参列させていただいた。その

平和式典が始まる前に何人かの被爆者の方たちが当時のことについて語られていた。その方々は当時の年齢が3歳から6歳と幼かったはずなのに、あれだけ語れるということは、当時の出来事が本当に衝撃的であったのだなと改めて感じた。

そして、最終日となる三日目は平和記念公園を周った。公園には沢山の慰霊碑や銅像があり、それぞれ被爆によって亡くなった方に対しての思いが込められていることを知った。特に、若い女性が子供を抱きかかえて逃げている姿を象った銅像が印象深かった。その女性は自分とほとんど年の変わらない若い教師で、当時は自分の命だけでなく、生徒の命まで守らなければいけないという大きな責任を負わされていた。それだけ日本は逼迫していたのであろう。もし、自分がその教師であれば他の命を守れるほどの心の強さはないと思う。

最終日に被爆体験講話を聴いた。今回、話をしてくださった内藤さんは7人家族で、生き残ったのは自分ひとりだけだと言う。生き残ったことに嬉しさよりも苦しさの方が強かったはずと心が痛んだ。また同時にこのように当時のことを語るまでにたくさんの苦しみや葛藤に苛まれたのだろうと感じた。自分の祖母も当時、長崎の近くの街で女学生として、被爆によってケガをした人の施設での受け入れや看病をしていた。私が広島派遣に行くにあたり、当時のことについて聞いたが詳しくは教えてくれなかった。それだけ祖母の目に映ったものは残酷で言葉にもしたくないものであったのだろう。実際、内藤さんもこのように被爆体験講話をすることになったのは今年からだそう。それでも当時の一つ一つの会話、情景など事細かに語っていただいた。なぜ、そんなに苦しい思いをしながらも語り継ぐことを決意したのか疑問にも思った。内藤さんは、語り継ぐ人も年々老いていき、亡くなっていくことで当時を知っている人減っていく。そして昔のことがなかったことになってしまわないように自分も語り伝えていかなければならないと思い、今年から語り部として当時のことを伝えているらしい。

今回、この派遣をとおして、自分がなぜ次の世代に伝えていかなければいけないのか意味がよく分かった。また、貴重な体験ばかりでその時、その時に感じたことを細かく伝え、より戦争の恐ろしさ、平和の尊さを伝えていくことができれば良いと思う。まずは、リレー講座などを通して語り継ぐことをしていき、自分の中で『平和』とはどのようなものかをしっかり考えていきたい。そして、これからの日本や世界の在り方を自分なりに理解し、行動できるようにしていきたい。